

飛鳥川の無常

辻 憲男（文学部教授）

飛鳥といえば万葉集である。ところが、有名な志貴皇子の、采女（うねめ）の袖吹き返す明日香風都を遠みいたづらに吹くにしても、山部赤人の「神丘」に登った時の、

明日香川淀去らず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくににしても、すでに旧都となった飛鳥を恋しく思う歌である。飛鳥はおよそ百年の都であった。万葉の文華は飛鳥の盛時に始まり、飛鳥を去って後に花開いた。平城遷都の途上の元明天皇も、「飛ぶ鳥の明日香の里を置いて去（い）なば君があたりは見えずかもあらむ」と、亡夫の眠る南山のほうを振り返った。女帝みずからが、そうして古京に名残を惜しんだのである（あるいは持統天皇の作かという）。

飛鳥の代表的な遺物は石舞台古墳。封土がなく、天井石の上でキツネが踊ったという伝説がある。…昭和の批評家・小林秀雄は、歴史とは人の生死を上手に思い出すことだと考えた。巨大な石組みをながめ、石工たちが土台だけをつくって、あとは大工に任せたのではないかと空想した。「冗談」である。そもそも日本の遺跡は石造ではない。木の建築は多く滅び去った。無常なる人間に対して、常なるものは「自然」である。「大和三山が美しい。それは、どのような歴史の設計図をもってしても、要約のできぬ美しさのように見える。万葉の歌人らは、あの山の線や色合いや質量に従って、自分たちの感覚や思想を調整したであろう。とりとめもない空想の危険を、わずかに抽象的論理によって、支えている私たち現代人にとって、それは大きな教訓に思われる」「山が美しいと思った時、私はそこに健全な古代人を見つけただけだ。それだけである」（「蘇我馬子の墓」）。



推古天皇の小墾田宮（おはりだのみや）跡伝承地。
奈良県明日香村豊浦。遠景は畝傍山（うねびやま）。